

〈研究ノート〉

ベトナムにおける教育改革の進展と小学校体育の現状

Progress of Educational Reform in Vietnam and Current State of Physical Education in Elementary Schools

村瀬 浩二 グエン・ティ・カム・ハウオン
MURASE Koji Nguyen Thi Cam Huong
(和歌山大学教授) (国立ハノイ教育大学講師)

2023年11月13日受理

Abstract

This study clarified the changes after the 2018 educational reform in Vietnam and the current state of physical education practice through interviews and class observations in a school. As a result, it became clear that in the 2018 educational reform, educational methods such as group learning and evaluation modeled on the community of learning (Sato, 2012), as well as interdisciplinary lesson research were carried out. Furthermore, it was clarified that educational content centered on improving the competency of subjects common was practiced. In addition, it was suggested that the contents of this reform were spread throughout the country through workshops held for teachers, lectures before the semester, and examinations to spread these contents and methods.

In addition, in the physical education department, common goals and group work class methods for each subject were practiced and changes due to the reform were strongly visible. On the other hand, in Vietnam, the situation of sports facilities such as grounds and gymnasiums are not well-developed, and there are significant differences between schools. Therefore, line up and gymnastics are emphasized as basic movements up to junior high school. Also, as a physical education subject, the acquisition of skills was emphasized.

1. はじめに

1.1. ベトナムの教育改革

ベトナムではこれまで1950年代から4回の教育改革が行われてきた。第1次改革は1951年に行われ、小学校、中学校、高等学校を4・3・3制とし、就学年齢を6歳からと定めた。第2次改革は1956年に行われ、教育による国民の育成、良い市民、良い労働者を育てることを教育目標とした。第3次改革は、79年であり国民のすべてに普通教育を受けさせることが目標の1つとされ、職業教育の促進を目的とした職業訓練学校が創設された(田畑, 2008)。最も近年に行われた第4次教育改革は2018年である。この改革は、児童生徒による知識の運用や能力開発が重視される普通教育カリキュラム(関口・ドアン, 2021)であり、国際化や高度情報化社会への対応を念頭に置いた改革であった。さらに、これ以外にも2000年前後にも政府によるカリキュラムの改正が行われているが、上述の4回の教育改革よりも規模の小さなものとして、ベトナム国内では改正と呼ばれている。

前述のベトナムにおける改革は、日本における学習

指導要領改訂と同様と捉えて良いだろう。日本における学習指導要領改訂は、約10年周期で行われている。また、日本において学習指導要領改訂が行われた場合、各自治体の指導主事らを対象とした伝達講習が行われ、それらを受講した者が各学校の主任教員を対象に伝達、そして各学校で主任が各教員に伝達し運用される仕組みとなっている。この学習指導要領は、法的拘束力を有しているもの(大崎, 2009)、その内容については学校現場では教師によって指導されるべきものに留まっており(植田・首藤, 2019)、具体的な教授方法や追加の内容については各教員に任されている。

一方、関口・ドアン(2021)によればベトナムでは2018年の教育改革以降、分化的で知識中心であった教育内容が統合的で児童生徒中心のそれにシフトしている。また、「チョーク・アンド・トーク」が象徴的であった以前の教授スタイルに対して、2018年以降では教師によって個別に決定されていた教育内容は、教員集団により合議的に決定されるように変化した。この大きな変化を進めるために、ベトナムでは全国的に学びの共同体(佐藤, 2012)を基にした授業研究スタイルが導

入され、1ヶ月に5～6回程度の授業観察が行われる場合もあるという。これは、教科横断型で行われており、校内においては他教科を含めた教員間の授業研究が活発になされ、さらには自治体単位では「授業の上手な教員」の表彰も行われている。これらの効果もあり、教室の授業ではグループ形式の議論や発表等が行われ、児童生徒が積極的、主体的に参加できる授業が実践されている学校もある(関口, 2019)。日本でも教授方法として学びの共同体は多くの自治体や学校で取り入れられているものの、ベトナムのように全国で一斉に導入されることはなかった。また、授業内容や授業方法についても、日本ではベトナムのような全国一律の劇的な変化ではなく、研修と実践の中で緩やかな変化をする。

1.2. ベトナムの体育科

ここではまず、ベトナム教育省(BOỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO)の一般教育カリキュラム 体育(BOỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO, 2018)から各学校種の体育科の目標や内容を以下に示す。これは日本の学習指導要領解説保健体育編にあたるものである。なお、体育科は1年生から12年生(小学校5年、中学校4年、高等学校3年)まで必修であり、校種や学年によりそれぞれ規定されている。この12年間のうち、小学校から中学校の9年間は義務教育である。また全ての学校種において体育科は、専科教員が担当する。

1.2.1. 体育科共通の目標

体育科は、児童生徒の健康管理能力、運動能力、運動およびスポーツの習慣形成およびその発展を目指し、健康な国民になるための資質と能力を身につけることに貢献する。また、身体と精神の調和、国家建設と防衛および国際統合に向けた、ベトナム国民の身体と体力の発達に貢献する。同時にスポーツの才能を発見し、育成する。

・小学校の目標

体育科は、児童が自分の健康と健康に気を配り、基本的な運動能力や運動習慣の形成、身体活動への積極的参加方法を理解するのに役立つ。スポーツは、スポーツの才能の総合的な開発と発見の基礎として、身体的資質を開発することを目的とする。

・中学校の目標

体育科は、生徒が基本的な健康管理と運動スキル、運動習慣とスポーツスキルを強化し、健康的で社会的で責任あるライフスタイルの発展に役立つ。また、学んだことを積極的に応用して体育やスポーツ活動に参加する。スポーツの才能を育てる。

・高等学校の目標

体育科は、生徒が身体トレーニングを行うために適切なスポーツを選択するのに役立つ。また、学んだこ

とを応用してライフスタイルや運動習慣を調整し、体力トレーニングやスポーツ活動に積極的に参加する。自制心、自信、正直さ、勇気、友好的な協力の精神を持つ。そこから、能力と得意分野に応じた将来への方向性を持ち、国家建設と防衛、そして国際統合に向かうことができる。

また、習得すべき資質・能力として、健康管理、基本的な動作、スポーツ活動の3種類が提示されている。以下に小学校段階での習得すべき資質・能力を示す。

・健康管理

一人の衛生状態、一般的な衛生状態、および運動やスポーツにおける衛生状態を理解し、実践する。

健康を守り増進するための食事の基本的な要件を理解し、実践する。

健康に有益な要素と有害な自然環境のいくつかの基本要素を認識し、適切な行動をとる。

・基本的な動作

テーマとなるプログラムの基本的な動作を習得する。

基本的な運動能力を身につける。

身体能力を発達させるために定期的に運動する意識を持つ。

・スポーツ活動

身体における身体活動の役割を認識する。

自分に合ったスポーツの基本技能を身につける。

自己規律を身につけ、スポーツの練習に積極的に取り組む。

これらは、日本の学校教育法で示された資質・能力の3要素「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」とは異なるものの、保健、運動技能、スポーツ実践に分かれており、ここで示された資質・能力は日本の3要素のいずれかに該当すると捉えられる。

1.2.2. 時数

小学校から高等学校の12年間を通じて1学年70時間であり、この内容のうち小学校における配分時間は基本的な動作65%(整列20%、基本的な姿勢と運動35%、演習10%)、選択スポーツ25%、学期末・年度末試験10%とされている。中学校では基本的な動作45%、演習10%、選択的スポーツ35%、学期末・年度末試験10%、高等学校では選択スポーツ90%、学期末・年度末試験10%と規定されている。なお、演習は基本的な動作等で学んだ運動の組み合わせによる創造的な運動である。

1.2.3. 種目

小学校の内容である基本的な動作は、整列や並び替え、移動、チームでのゲームなどが含まれている。これに、中学校では短距離走やボール投げ、中距離走、走り幅跳び、走り高跳びが加わる。また、高等学校で

表1 小学校～高等学校での体育科の内容
(小学校～中学校までは奇数学年、高等学校は12年生のみを示す)

学 年	内 容
1年生	<ul style="list-style-type: none"> 基本的動作…整列(起立、休め、縦・横の整列、回転、チームトレーニングゲーム)、演習(年齢に応じた運動動作と応用ゲーム)、姿勢と基本的スキル(頭、首、腕、足の基本的運動、身体の協調的運動、運動能力と反応速度を高めるゲーム) 選択スポーツ(年齢に応じたスポーツ、好みのスポーツづくりをサポートするゲーム)
3年生	<ul style="list-style-type: none"> 基本的動作…整列(チームの変更、安定した動作、チームトレーニングゲーム)、演習(年齢特性に応じた運動と応用ゲーム)、姿勢と基本的スキル(障害物を越える運動、手で投げたりキャッチする運動、運動能力と反応速度を高めるゲーム) 選択スポーツ(年齢に応じたスポーツ、好みのスポーツづくりをサポートするゲーム)
5年生	<ul style="list-style-type: none"> 基本的動作…整列(チームでの整列、学んだ内容の実践、チームトレーニングゲーム)、演習(年齢特性に応じた用具(旗、花、フープ、棒など)を組み合わせた運動、創造的なゲーム)、姿勢と基本的スキル(回転スキル、クライミングスキル、調整力を高めるゲーム) 選択スポーツ(年齢に応じたスポーツ、好みのスポーツづくりをサポートするゲーム)
7年生 (中学校2年生)	<ul style="list-style-type: none"> 基本的動作…短距離走(走動作の基礎、60m走、スキルアップゲーム)、走り幅跳び(走り幅跳びの基礎、着地、スキルアップゲーム)、中距離走(ランニングのスキル、中距離走のコツ、持久力向上ゲーム) 演習(年齢特性に応じた体操、調整力を高めるゲーム) 選択スポーツ(地域や学校の状況に基づき、生徒自身に適したスポーツを選択できるよう次のうちから指導；体操、水泳、サッカー、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、セパタクロウ、卓球、武道、ダンス、エアロビクスダンス、地域の伝統スポーツ)とその補助的ゲーム
9年生 (中学校4年生)	<ul style="list-style-type: none"> 基本的動作…短距離走(走動作の基礎、100m走、スキルアップゲーム)、走り高跳び(走り高跳びの基礎、走り高跳びのコツ、スキルアップゲーム)、中距離走(ランニングのスキル、中距離走のコツ、持久力向上ゲーム) 演習(9年生の体操、調整力を高めるゲーム) 選択スポーツ(地域や学校の状況に基づき、生徒自身に適したスポーツを選択できるよう次のうちから指導；体操、水泳、サッカー、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、セパタクロウ、卓球、武道、ダンス、エアロビクスダンス、地域の伝統スポーツ等)とその補助的ゲーム
12年生 (高校1-3年生)	<ul style="list-style-type: none"> 選択スポーツ(地域や学校の状況に基づき、全国大会やブードン健康協会で使用されているスポーツから適切なコンテンツを選択する。体操、水泳、サッカー、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、羽蹴り、卓球、武道(ボビナム、空手道、テコンドー等)、テニス、ハンドボール、ダンス、エアロビクスダンス、セパタクロウ、地域の伝統的スポーツ等)

は3学年を通じて選択的スポーツのみが示されている。表1には、1～9年生のうち奇数学年と高等学校の内容を示した。

では、これら体育科の内容に関する授業方法に対して、前述のベトナムにおける改革による教員研修は実際にどのような影響を与えているのであろうか。

なお、本研究は「Virtual Schoolにおける体育カリキュラム開発に関する実証的研究(国際共同研究強化B：20KK0049)」の一部として行われた。この「Virtual Schoolにおける体育カリキュラム開発に関する実証的研究」は世界各国の体育科の現状を調査し、世界市民を育成する上で学校教育が育むべき資質・能力を明らかにすることを目指したものである。

1.3. 目的

そこで、本研究はベトナムにおける学校教員やその教員研修を担当する大学教員へのインタビューから、教育改革によって示された獲得すべき資質・能力を育むための教員の授業研究や研修の実施状況を明らかにする。また、それらが体育科における実践状況にどのように反映されているかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2023年3月に国立教員養成系大学教員2名とベトナムハノイ市内の私立学校Western Hanoi School 理事長1名および学校長1名、教員4名へのインタビューを行った。また、私立学校における体育、英語、国語の授業観察を行った。これら、インタビューと観察の結果から、ベトナムの授業研究や教員研修の状況と体育科の実践状況への影響を考察する。

3. 結果

3.1. インタビュー結果

3.1.1. 国立教員養成系大学教員へのインタビュー

2名の大学教員(A、B教員)は体育科教育を専門としており、小学校から高等学校までの教員研修を担当する立場であった。それぞれのインタビュー結果を要約して以下に記す。

3.1.1.1. A教員のインタビュー結果

A教員は2018年前後の変化について①授業内容、②評価方法、③教師と児童生徒の役割の変化、④教授方法の4点から回答した。これらについて示す。

①授業内容の変化について

以前は教育省の決めたカリキュラムに沿って教えて

いた。現在では、学校の設備や教師の能力に合わせて教えることができるようになった。また種目についても、必修と選択がある。必修種目は体操、陸上(走り高跳び、走り幅跳び、ボール投げ)である。今の教授方法は児童生徒の能力を活かすように変わった。例えば、小学生に対してスピードを発達させたい場合、それに合った方法を教師が選ぶこととなる。2018年以前は、授業がすべて決められていたが、現在では教師が決められるように変わった。つまり、高めたい運動能力を決め、それに合わせた授業をすることができる。瞬発力を高めることを目的とした場合、走るだけの授業をする教師はいる。一方で、コーディネーションに取り組む教師もいる。誰でもそのような知識を持っているわけではないが、学期前に教育省による研修会において、内容について紹介される。ただし、ベトナムでは施設の差が大きく、体育館どころかグラウンドさえない学校がある。その場合は校庭で授業を行っている。また、小学校、中学校、高等学校を通じて授業は教育省の担当者に査察される。教師は毎学期、自分から授業のアイデアを出さなければならないが、その実践をここでチェックされる。年配の先生にとっては難しいことなので、簡単なゲームばかりを行う人もいる。

②評価について

2018年以前は、決められた基準について教師が評価していた。例えば、陸上のタイム、体操であれば姿勢が正しくできているかどうかといった基準である。現在でも基準の達成度による評価は存在するが、体力の低い児童生徒に対してはその基準を変える。また、現在では教師だけでなく、クラスメイト同士、他のクラスの児童生徒による評価、保護者からの評価、地域の運動大会の評価も加味される。ボールゲームについては一定の基準を設けている。例えばバレーボールはパスの回数とそのフォーム、バスケットやバドミントンも同様である。

クラスメイトなどの他者評価についてはグループのリーダーが評価し、教師に報告することとしている。事前に基準を発表し、この評価を行う。

③教師と児童生徒の役割の変化について

グループでの学習は一般的なものであり、クラスサイズにもよるが1グループ8名程度で構成されている。以前は、教師は指導者、児童生徒は聞くだけという授業であったが、それでは想像力の成長が見込めない。そこで、今では児童生徒がアイデアを出し、チームワークを用いて学習を進めるようになった。そのため、教師の役割は指導者からファシリテーターに変化した。また、児童生徒には創造性を中心とした多くの能力が求められるようになった。体操や整列では創造性の発達を期待できないが、サッカーやバレーボール、陸上運動ではうまくやる方法や記録を伸ばす方法に創造性を期待することができる。

④教授方法について

以前は、教師と児童生徒が「教える－聴く」の関係であったが、今は児童生徒が積極的にチームワークを行ったり、自分の意見を出したりすることができるようになった。また、ほかの教科に関連する内容を取り入れることが可能になった。ランニングの時に信号を使う、英語で指示を出すといった方法に積極的に取り組むようになった。このような教科横断的な内容は推奨されている。ただ、年配の先生には難しいかもしれない。しかし、年配の先生には経験があり、クラスのコントロールや実技の評価は的確である。

また、保護者の考え方も変わった。以前は体育をリラックスタイムと捉えていたが、現在では体力向上と、さらに複合的に役立つものという認識となっている。

3.1.1.2. B教員へのインタビュー結果

B教員は2018年の小学校、中学校、高等学校の新カリキュラムに関する研修会に関する資料作成に携わっており、研修会も担当していた。そこで、①教員の研修会について、②2018年の改革について、③評価についてインタビューを行った。概要を以下に記す。

①教員の研修会について

新カリキュラムが発行され、私は研修会を担当した。その研修会において重視された内容は以下の5つである。

- (1)新カリキュラムの理解
- (2)学習者の発達させる方針に向けた教授法の伝達
- (3)学習者の能力を評価する方法
- (4)教師の教育計画の作成
- (5)ICTの活用

これらに関する資料作成に携わった。これらの資料は、参加する各学校の体育主任教師が5日間かけて自習で読み、3日間の対面での講義、7日間の復習(オンライン)の過程で使われる。研修は、資料を先に読んだ上で、各グループに課題が与えられ、その課題に対するアイデアを発表する。他のグループのメンバーはコメントや評価を行い、私自身も評価をする。そのため、参加者は真剣に参加する。また、その後の7日間の復習期間では質問をしてくる。この7日間で合格できないと、教員としての資格がもらえなくなる。また学校の代表として参加しているので、処罰がある。処罰を2回受けると、教師としては免職することとなる。

②2018年の改革について

2018年以前は、体育科の教科書があった。現在の教科書は参考資料であり、目標は同じだが4種類の教科書が存在している。それぞれ内容は違っており、それを基に教師は授業を作成する。

これほどの改革があったのは4回目だが、今回が一番大きいと認識している。(なぜこのような大きな改革が必要となったか)それは、世界との交流のために必要

であった。今の世界の流れは学習者のコンピテンシーの発達を目指しており、ベトナムもそれに合わせた。OECDの方針に合わせた改革である。目標とする学習者の資質・能力は以下の通りである。

・全科目に通じる基礎的資質・能力

- (1)自律
- (2)協力
- (3)問題解決・創造力

・体育で目指す資質・能力

- (1)健康維持・増進
- (2)基礎運動技能
- (3)運動技能

内容には体育の必修種目と選択種目がある。必修部分は教育省の指定であり、選択部分の実施だけではすべての目標を網羅できない。様々な種目の中で発達を促す必要がある。また、工夫や創造性はすべての科目で教育省によって重視されており、体育においても同様である。2018年以前は教科書通り教えれば良かったので、工夫や創造性は必要なかったが、今ではその点が最も重視された。

③評価について

評価は主に2つの方法で実施している。毎時間の評価と単元中間や単元終了時に行う定期評価である。毎授業の評価は、チェックシートに評価される。そのうえで能力別に分けられ学習が進められる。定期の評価については集合の仕方や体操、基本動作の出来映えが対象となる。

3.1.2. ハノイ私立学校長および理事長へのインタビュー

ハノイ市内の私立学校Western Hanoi Schoolの学校長と理事長へのインタビューを行った。理事長は、前述の国立教員養成系大学を退職後、本校の理事を務めており、大学では数学教育、小学校教育、管理職(副学部長)、教育省の教育改革や教師育成プロジェクトにも携わった経歴がある。本インタビューは学校長と理事長の2名に対して同時にインタビューを行った。この内容を要約して以下に示す。

①教師育成システムについて

教師間の授業見学は、全国的に全校種で実施されている。本校では、小・中・高それぞれの教員が別々の校種を見学する。一般的に、授業見学にはいろいろな方法があり、2018年の改革以降によく行われるようになった。そのなかには、若い教師を対象とした見学活動、新しい授業内容の見学、優秀な授業を見学するなど様々な形式を取っている。本校は、小・中・高の一貫校なので異校種間の見学については、公立校では難しいだろう。ただ、公立校でも他校の教え方の上手な先生の授業を見に行く機会はある。また、本校では小・中・高の交流もあり、新しい内容を取り入れようとす

際には模擬授業を行う。それはSTEM教育の形式を取るようにしている。その際、どの教科でもどの校種でも教師同士は対等な関係である。

②2018年改革前後の変化について

改革以前は、教師が伝えること、児童生徒の理解が重視されていたが、改革後の今は児童生徒の資質・能力、理解してできることを重視している。これは、全人的な能力を育てることを重視している。そのため、体育も重視されている。長い間、健康について重視されてこなかったが、今では健康が重要であることとその自覚を持たせることに注力している。現在では、子ども達はスポーツや絵画のクラブにも通うようになった。

教師については、改革の前後においてすぐが変わったとは私は感じていない。長い改革の過程のなかで、経験が必要となるものである。そのため、現在でも改革の最中であり、今年4年生の新教科書が発刊される予定で、5年生、9年生、12年生はまだ新しい教科書ではない。

教師自身の教授法については変化が起きている。以前は、伝統的で一方的な教授法であったが、現在ではグループ学習を活用するようになった。また、児童生徒の興味を引き出すことが重視され、評価は学習過程を評価するように変化した。

③体育の扱いについて

近年、保護者は体育や音楽を重視するようになった。以前は数学や国語(ベトナム語)、英語などが重視されていたが、その意識に変化が起きた。以前も、国家の方針としては重視していたが、今では家庭において児童生徒の健康が重視されるようになった。本校では、スポーツを好きになり、将来のスポーツ参加を体験できるようにしている。

3.1.3. 体育授業の参観および担当教員へのインタビュー

3.1.3.1. 中学校1年生の体育授業参観およびインタビュー

Western Hanoi School中学校1年生(6年生)の体育授業を参観した。生徒は1クラス18名で、私立学校としては一般的なサイズである。教育省の定める授業時間は45分だが、本校では40分で実施していた。前半は体操、後半はバスケットボールの授業であった。体操(写真1)の授業は、以前日本でも行われていた徒手体操であり、いくつかの動作を順に行っていた。いくつかの動作を数名の生徒が前に出て示範しながら行った。その後、グループのリーダーの生徒が前に出てチェックを行い、〇〇さんは腕を伸ばしているなどと述べて、仲間の評価を行った。

これらを15分程度行った後、バスケットボールに移行した。最初は2人組でのバウンドパス(写真2)、次



写真1 中学校1年生体操



写真2 バスケットボール パス場面

にパス&ラン、2 vs 1でのシュートゲームで時間が終了した。

教員によると、この進め方は教育省から例示されているものであり、バスケットボールを経験してきた生徒が2名しかいないため、基礎的な技能から取り組んでいた。また、ここまでの5ヶ月間については教科書に則って教えていたが、指定された種目をすべて実施できていない。さらに私立の特徴を出すため、この教師はいくつかのスポーツを取り入れていた。公立学校は教科書に則って授業を進めるが、教師が自分でスケジュールを市に提案して、許可を得れば変更することができる。また、私立学校教員は学校のカリキュラムに則り、自身でアイデアを出す必要がある。毎年11月20日に教師の日があり、その時期にはたくさんのイベントや試験が開かれる。これは、市や県のレベルで行われる。試験に落ちることはないが、評価を受け、成績が良ければ給与に反映される。

3.1.3.2. 小学校1年生の体育授業参観およびインタビュー

Western Hanoi School小学校1年生の授業を参観した。この授業は、整列単元の一部である。授業の導入では、だるまさんが転んだを行った(写真3)。その後、起立、休め、整列といった動作が行われた(写真

4)。この整列の動作の後、リーダーの児童が前に出て、他の児童達に注意する姿が見られた(写真5)。これらの整列動作の終了後、ボールとフープを使ったゲームが行われた。ボールを持ってフープをくぐり、コーンで折り返して戻ってくるリレーゲームである。コーディネーショントレーニングをゲーム化したものである(写真6)。このリレー終了後、振り返りを行い、授業終了となった。

担当教員によれば、整列部分に関しては教育省の示すカリキュラム通りだが、導入のだるまさんが転んだ



写真3 小学校1年生整列 (だるまさんが転んだ)



写真4 小学校1年生整列



写真5 小学校1年生整列 (グループ学習)



写真6 小学校1年生 コーディネーションゲーム

やコーディネーションゲームに関しては自身のアイデアであった。

3.1.3.3. 体育主任教員へのインタビュー

Western Hanoi Schoolの小学校から高等学校を通じた体育科の主任教員へのインタビューを実施した。要約を以下に示す。

グループ学習については毎授業行っており、授業の内容によってその方法を変えている。グループサイズは活動の難易度によって変えることがある。簡単な活動であれば、1クラス2グループで実施することもある。通常は3グループに分けている。グループサイズが大きい場合にはリーダーが重要となる。学習の当初は少人数のグループで行う。授業の流れとして、前時までの復習、新しい学習、練習、応用、振り返りという流れである。

このような授業方法に関する会議は、週1回、体育科において行っている。この中では、授業の作り方や運営方法について意見交換を行う。また、1ヶ月に1度は全教科での会議を行う。全体での会議では、教科専門知識ではない部分について、例えばクラスの運営や児童生徒たちの態度について意見交換を行う。研究授業も1ヶ月に1度は行うことになっている。この方法は日本から導入されたものである。

一般校では設備の問題からこのような授業ができない場合がある。体育館を持つ学校は少なく、グラウンドも十分な広さがない場合が多い。そのような状況では、ボールゲームのようなスポーツを実践することは難しいであろう。

3.1.3.4. 5年生主任教員へのインタビュー

Western Hanoi School 5年生の学年主任教員へのインタビューを行った。要約を以下に示す。この教員が担当する科目は数学とベトナム語であるが、授業研究を統括する立場でもあるので、それを中心にインタビューを行った。

授業の進め方については、復習、グループワーク、振り返りの流れで行っており、1小学校1～5年生共通の授業構成である。また、さらに詳細な流れとして、Step 1 導入、Step 2 授業の紹介(復習と実習)、Step 3 練習、Step 4 応用という流れで行っている。このうち、練習と応用が授業において重要となる。練習は、例えば国語であれば聞く、読む、話すといったスキルにあたる。本校には障がいのある児童が入学するケースがあり、その場合には加配の教員や保護者の参加を認める場合がある。そのような児童は、日常生活に問題なければ入学可能である。

4. 考察

4.1. 教員養成系大学教員へのインタビュー

これらのインタビューでは、A教員、B教員は共に2018年の改革以降の変化を強調していた。それは、改革以前には決められた内容に沿って教師が授業を行っており、それに対して改革以降では必修と選択の種目は存在するものの、教師がその教授法についてアイデアを出すことを求められるようになったことである。また、児童生徒に対してもコンピテンシーベースの学習が求められており、児童生徒自身が主体的に取り組み、協力して創造的な問題解決に取り組む学習に変化したといえよう。これについて両教員が述べているように、2018年改革は教育内容や方法に急激な変化を求めており、日本の学習指導要領公布後の状況を鑑みると、ベトナム全土の教員に浸透するにはかなり時間がかかるように思われた。だが、ベトナムにおける2018年の改革時には約2週間にわたる研修会が行われ、教育の目標、各教科の目標、内容や方法が伝達されている。さらには各学期前にも研修会が行われており、それぞれの研修会で、教師自身がその授業方法についてアイデアを出さなければならない。これらの研修が、教師の授業方法に関する理解度をかなり高めていると考えられる。

また、評価方法についても変化が起きた。2018年改革以前は、それぞれの運動に対して一定の基準があり、その達成度によって評価していた。しかし、現在では単元中間や最後の評価に加え、毎授業の評価が行われている。さらには、児童生徒同士の評価や保護者による評価など多様な評価方法が取り入れられることとなった。これについても、教科共通の目標である児童生徒の主体性や協働的な創造性の育成を重視したことから導入されたと解釈できる。しかし、体育としての目標は体力向上や技能習得であり、単元終了時の教師による評価は体育として目標とする資質・能力の習得を目指したものである。この点は、旧来の評価方法が残ったものと捉えることができよう。

4.2. ハノイ市内私立学校長および理事長へのインタビュー

教師育成システムについて、Western Hanoi Schoolでは小・中・高の区別なく、お互いの授業を参観し、授業研究を行っていた。これは、教科を越えたSTEM教育にも活用されていた。このような授業研究については公立校も同様であり、若い教師を対象とした研究授業、新規の内容に対する授業研究、優れた教師の授業参観といった様々な形態がある。このため、この学校に限らず、他の教師を参観することによる授業研究は、小学校から高等学校までかなり頻繁に行われており、全国的に一般化していることが示唆された。

また、2018年の改革前後において資質・能力を育てることに教育が変化した。ただし、改革はまだ途中であり、全学年に浸透するのは2023年である。しかし、教師の教授法にはかなりの変化が認められ、児童生徒の興味を引き出すことが重視され、学習過程での評価が行われるようになった。これは、教師が改革による急激な変化に対応したことを示しており、研修会や授業研究が効果的に働いていることを示唆する。

また、体育科は近年、保護者からも重視されるようになってきており、生涯スポーツにおける種目選択を重視していることが示唆された。

4.3. 体育授業参観およびインタビュー

Western Hanoi Schoolにおいて中学校1年生および小学校1年生の体育授業参観を行い、その授業について教員にインタビューを行った。

中学校1年生では、1時間の授業の前半に体操、後半にバスケットボールが行われていた。体操において、生徒同士のグループ内での相互評価が行われており、生徒達の中に浸透している様子であった。これは小学校1年生の授業でも同様で、児童同士が評価し合う仕組みを低年齢の段階から身につけていると捉えることができる。また、グループ学習が行われているが、佐藤(2012)の提唱するような4名程度のグループではなく、8名程度のグループで行われていた。これは、大学教員のインタビューに述べられているとおり、ベトナム全土に対してグループサイズとして伝達されたものであり、全国的なクラスサイズに対応するためと捉えられる。Western Hanoi Schoolでは1クラス18名程度で授業を行っているが、公立学校では40名以上で授業を行わざるを得ない。そのため、グループサイズを8名程度とする必要があったのであろう。

また、授業内容としては、特に小学校1年生クラスにおいて教師のアイデアが見られた。それはだるまさんが転んだやコーディネーションレースである。これら、児童同士の評価やグループ学習、教師のアイデアの導入が、2018年の改革を反映していると捉えられる。

一方で、中学校1年生のバスケットボールではバ

ス&ゴーや2vs1といった戦術学習を意識した内容は見られたが、教師のアイデアが反映されたものではなかった。スポーツ種目においては、アイデアを出すためには各種目の専門性が必要とされるため、ここには出されていなかったのであろう。

体育主任教員によれば、体育科における会議が週1回、全教科を通じた全校での会議が月1回、さらには研究授業が月1回行われており、この学校では熱心な授業研究が行われている。そのため、グループ学習や授業の進め方が教科を越えて共有されており、教師間の相互理解も高い。

これについては、他教科を担当する5年生主任もグループ学習や授業の進め方について同様の回答をしていることから全教科を通じて共有されていることがわかる。また、インクルーシブについても、授業進度の障害とは捉えておらず、加配や評価基準を変えることで対応していることから、そのような対応が一般化していると捉えることができよう。

4.4. ベトナムの研修制度について

ベトナムの教育における授業内容や方法は、2018年の改革後、全国一律に変化をしていた。これは日本と比較すると急激な変化と捉えることができる。この原因は、研修制度であろう。なぜなら、内容については施設の状態によって追加や修正が許されており、方法についても教員個人にその創出を求められるため、法的拘束力としては日本と大きな差はないと考えられる。一方、研修制度は充実しており、教師全員がカリキュラム発行時の研修、学期前の研修を義務づけられている。このなかで、内容の理解に関する確認、方法についてアイデアの創出を求められており、さらに研究授業の実践や学校内外の授業研究によって授業内容や方法に関する理解が深まっていると捉えることができる。

5. まとめ

本研究は、ベトナムにおける2018年の教育改革後の変化と体育実践の現状を、現地でのインタビューと授業観察から明らかにした。その結果、2018年の教育改革では、学びの共同体(佐藤, 2012)をモデルにしたグループ学習や評価等の教育方法、強化横断的な授業研究が行われていること、さらには教科共通の資質・能力向上を中心とした教育内容が実践されていることが明らかになった。また、これらの内容や方法を浸透させるために教員を対象に行われた研修会や、学期前の講習、試験が、この改革の内容を全国的に浸透させていることが示唆された。

また、体育科においても教科共通の目標やグループワーク授業方法は実践されており、改革による変化が色濃く見られた。一方で、ベトナムではグラウンドや体育館といった体育施設の状況が整っておらず、学校に

よる差異が大きい。そのため、中学校までは基本的動作として、整列や体操が重視されている。また、体育科としては技能の習得が重視されていた。

ただし、本研究の調査結果は教員養成大学と私立学校それぞれ1校のみに留まっており、公立学校の状況は確認できていない。ベトナム、特にハノイ近郊の公立学校は、人口増加のため1クラスの人数が多く、午前と午後の半日ずつに分かれているという。そのため、公立学校では施設も状況も大きく違っており、本研究結果を一般化できない部分はある。

今後の展望

本研究はベトナムの体育科において育成を目指す資質・能力とまたそれに関わる教師育成システムを明らかにした。今後は世界各国における調査から、持続可能な社会を支える世界市民を育成する上で、学校教育が育むべき資質・能力を明らかにする。

追記

本研究は国際共同研究強化B(課題番号：20KK0049)の助成を受けている。

文献

BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO(2018)CHU' o'NG TRINH GIÁO DỤC PHỒ' THÔNG MÔN GIÁO DỤC THỂ' CHẤT.

大崎素史(2009)小学校学習指導要領の改訂について. 創大教育研究, (18), 1-8.

田畑亨(2008)ベトナム社会主義共和国の体育・スポーツ教育の現状. 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要, 1, 55-69.

佐藤学(2012)学校を改革する 学びの共同体の構想と実践. 岩波ブックレット, 東京.

関口洋平・ドアンゲットリン(2021)ベトナム初中等教育改革における授業研究の位置づけ: 統合的な学習への転換という視点から. 国際教育協力論集, 24(1), 77-95.

関口洋平(2019)ベトナム農村部の基礎中学校における授業改革に関する一考察-「授業研究」を通じた教育実践の変容-. 国際教育協力論集, 22(1), 1-14

植田健男・首藤隆介(2019)今次学習指導要領改訂の教育課程経営論的検討. 日本教育経営学会紀要, 61, 13-22.